

人種主義的アフリカ觀の殘影

——「セム」「ハム」と「ニグロ」

栗本英世

序 アフリカ人にとっての人種概念の重要性

はじめに——刻印された肌の色

肌の色合い、頭髮の縮れ具合、顔かたちといった身体的特徴に基づく人間の集団の分類、つまり人種觀は、アフリカ人にとつてもおおきな社会・文化・政治的意味合いをもっている。近代に成立したヨーロッパの人種觀、人種理論において、北西ヨーロッパの白人はもつとも優等な人種、アフリカ人、つまり「黒人」はもつとも劣等な人種として認識されていた。こうした認識は、ヨーロッパ的な、文明と未開・野蛮の二元的世界觀の一部をなすものであり、奴隷交易や植民地支配を正当化するイデオロギーとして利用された。黒人の棲むアフリカは「暗黒大陸」であり、そこを文明化することは白人の責務、あるいは重荷と考えられていた。これは、人種主義・人種差別主義の一形態にはかならない。近代の日本人も、福沢諭吉などを通して、こうしたヨーロッパの人種觀を受容し、自分のものとしたのだった。「有色人種」であつた日本人は、自らを優等人種仲間入りをしつつある者と認識することによって、他のアジア人やアフリカ人に対する差別的な眼差しを獲得したのである。^①

近代の世界においてヨーロッパ・北米の諸国が覇権を握り、アフリカ人やアフリカ系の人びとを搾取・抑圧してきたために、人種差別主義的な制度とイデオロギーは、「白」対「黒」の領域においてもっとも深刻で先鋭的なかたちで実現・表現されることになった。

近代ヨーロッパの人種観は、アフリカにおおきな刻印をのこした。奴隷交易と植民地支配の負の遺産が、現代のアフリカを抱える政治・経済・社会・文化上の諸問題の主要な原因のひとつであることは衆目の一致するところである。奴隷交易と奴隷制は、すでに一九世紀に廃止され、二〇世紀後半には植民地支配も終焉を迎えた。しかし、こうした過去はけっして「清算」されたわけではない。また、現代では、さすがにアフリカ人に対してあからさまな人種差別主義的言辭を弄することはない。しかし、アフリカ諸国の多数が直面する経済的発展の停滞、あるいは後退、政治的な不安定さや混沌、飢餓や内戦、虐殺などのゆえに、未開・野蛮というイメージが再生産されていることも事実である。政治経済的な現象を、歴史的文脈や国際的な環境ではなく、アフリカ人固有の特質とみなされるものに帰することは、あらたな人種差別主義にはかならない。そしてあらたな人種差別主義は、犯罪学や知能測定といった科学的な装いをまといつつ一九八〇年代以降の現代においても再生産されている (Rigby 1996a)。つまり、人種をめぐる問題は依然として今日的であり、過去をふりかえることでもあるといえる。

ところで、アフリカ人にとつて人種的な意識は、たんにヨーロッパ人から一方的に押しつけられたわけではない。植民地支配からの解放闘争は、あるいはポジティブな主体性を回復する運動は、ネガティブな意味を付与された黒い肌の意味づけを逆転することによって可能になったのであった(本書松田論文参照)。しかし、肌の色に対する意味づけは、完全に逆転されたわけではない。ナイジェリア人の作家、チヌア・アチエベは、以下のように述べている。

言うまでもなく、私たち〔アフリカ人〕も、自らの名前を貶める罪や不敬を犯してきた。もし私が神なら、人種的劣性の受用をこそ、その理由がなんであれ、最悪の過ちとみなすであろう。それをどうにかする、あるいは他人に責任をかぶせるには遅すぎるし、他人がこうした非難にあたいするかどうかともわからない。私たちに必要なの

は、過去をふりかえって、どこでまちがったのか、どこで雨にはげしく打たれるようになったのかを見つけることである。(Achebe 1989: 43; quoted in Rigby 1996: 65)

いずれにせよ、ヨーロッパ人とアフリカ人は、一方的な支配／被支配、名づけ／名づけられる関係にあるのではない。したがって、関係の相互性をみていくことが重要である。

ところで、人種をめぐるヨーロッパ人との関係において、すべてのアフリカ人が足並みをそろえ、一致した立場をとっているわけではない。肌の色の区別に基づく人種差別主義的な関係は、アフリカ人の内部にも存在する。ここでいう、「アフリカ人」とはアフリカ大陸の住民のことである。アフリカにおける人種差別といえ、ふつうは南アフリカ共和国のアパルトヘイトを代表とする、ヨーロッパ人入植者とその子孫と、土着のアフリカ人との関係を想起するだろう。しかし、本論で扱うのは、土着のアフリカ人同士のあいだにおける人種差別主義的な関係である。

アフリカは通常、地中海に面した「サハラ以北のアフリカ」と「サハラ以南のアフリカ」というふたつの地域に大別される。後者は「黒(ブラック)アフリカ」と呼ばれるように、「ニグロ」すなわち「黒人種」の故郷である。それに対してサハラ以北のアフリカは、黒ではなく、むしろ褐色あるいは白い地域とみなされてきた。本論で扱う東・北東アフリカは、まさに二つのアフリカが境を接し、交じり合う地域である。現在の国名でいえば、スーダン、エチオピア、エリトリア、ソマリア、ウガンダ、ケニア、タンザニア、ルワンダ、ブルンジなどを含む地域である。この地域では、「白い」土着のアフリカ人と、「黒い」土着のアフリカ人との関係が、アフリカ大陸のなかでもっとも先鋭で深刻なかたちで現れてきた。

私は、この地域の南部スーダンとエチオピア西部のそれぞれで、パリ、アニエワと自称する民族集団の人類学的調査をおこなってきた。^③パリ語とアニエワ語は、言語学的にはいずれもナイル・サハラ語族シャリ・ナイル語派東スーダン諸語の低位区分であるナイル諸語西ナイル語群に属する、きわめて近縁の言語である。ちなみに、ひとくちに黒人といっても、その身体的特徴は個人によっても集団によっても多様であるが、パリ人、アニエワ人、さらにデイン

カ人やヌエル人など、言語学的には西ナイル語群に属し、一般的にはナイル系と呼ばれる人びとは、アフリカの黒人のなかでもっとも黒い肌とスリムな長身、長い手足を特徴とするといわれている。たとえば、東・中央アフリカの言語・民族の分類ではバントウ系と呼ばれ、相対的に黒くなく、スリムでも長身でもない人びとと比べると、その違いはあきらかである。

ある言語「民族集団内部で形質的な多様性があるのはもちろんである。しかし、たとえば南部スーダン人のヌエル人やディンカ人の大多数は、ケニアの首都ナイロビ、スーダンの首都ハルツーム、エチオピアの首都アディスアババの路上では、形質的な特徴——とくに黒い肌とスリムな長身——のゆえにきわめて可視的な他者として現地社会の住民に認識される。つまり、ひとめで南部スーダン人であるとわかる。

ところで、民族集団間の形質的な相違があるという自己／他者認識が、ただちに人種の相違として認識されるわけではない。本書の他の諸論文と同じく本論は、民族集団と同様に、人種も社会的な構築物であるという立場に立つ。そこで問題になるのは、特定の政治・歴史的な文脈のなかで、形質的な差異が、集団間の本質的な差異を表象する主要なマーカ―として「人種化」(racialize)される過程である。

南部スーダン人の「可視性」に話を戻せば、ナイロビの地元住民にとって南部スーダン人との形質的なちがいは、人種のちがいとして問題化されることはない。しかし、ハルツームやアディスアババでは、それぞれの社会の主流集団——アラブ系の北部スーダン人とエチオピア高地人——と南部スーダン人のような黒人との関係は人種化されている。その背景には、後述するように過去から現在にわたる支配・被支配の関係がある。この複雑な過程に光をあてるのが、本論の目的である。

そもそも、日本人からみれば、あるいはアフリカ系アメリカ人からみても、北部スーダン人とエチオピア高地人はアフリカ人≡黒人である。しかし、彼らのあいだで主流となってきた自己認識はそうではない。こうした自己認識は、彼らが黒人と認識する人びととの関係のなかで、非黒人の方向に人種化され構築されてきたのである。スーダン、エチオピアという国名・地域名の原義は、いずれも「黒人の地」であることを考えれば、この現実⁽⁸⁾は皮肉である。

アフリカにおける人種主義と社会関係の人種化は、植民地支配によってもたらされたという議論がある。ある面ではこの議論は正しい。後述のように、ヨーロッパ人が持ちこんだ人種概念が、東・北東アフリカの人びともおおきな影響を与えた。

しかし、この地域の人びとの人種概念を考察するさいに重要なことは、竹沢が本書総論で強調しているように近代ヨーロッパで構築され普及した人種概念と、ヨーロッパとの接触以前から存在したと考えられる土着の人種概念との絡まりあいである。両者は相互に影響を与えつつ、現在の人びとが抱く人種概念が形成されたと考えられる。

土着の人種概念

土着の人種概念の例として、パリ人とアニューワ人場合をみてみよう。彼らは認知している人間を、肌の色にしたがって、「黒人」(yo chol, jur mu chol)、「赤人」(yo kwar, jur mu kwar)、「白人」(yo tar, jur mu tar)の三つに分類している。パリ語、アニューワ語のいずれにおいても「ジョー」(jo)は人びと、「ジュル」(ju)は部族や民族集団を、「チヨル chol」、「クワル kwar」、「タル tar」は、それぞれ黒、赤(褐色も含む)、白を意味するから、字義どおりこれらの語彙は黒人、白人、白人と訳すことができる。

この分類の中で、彼ら自身はもちろん黒人である。隣接する諸民族集団の人びと、そして直接間接に知っている場合は、ケニアやウガンダなど他の諸国の人びともこのカテゴリーに含まれる。

白人はヨーロッパ人を指す。パリやアニューワが知っているヨーロッパ人には、植民地スーダンの支配者であったイギリス人、キリスト教の宣教師であるイタリア人やアメリカ人、一九三七年から四一年までエチオピアを軍事的に支配したイタリア人、現代ではNGOや国際機関で働く人たちが含まれる。パリ人やアニューワ人が居住する白ナイル川の上流部は、アフリカ大陸のなかでも「奥地」であり、ヨーロッパ人が到達したのは一九世紀後半のことにはすぎない。したがって、彼らと白人との直接的接触の歴史的深度は浅い。直接的接触以前に、「白人」というカテゴリーがあったかどうかは推測の域をでないが、なかったと考えるのが妥当だろう。

赤人は、褐色の肌の北部スーダン人とエチオピア高地人を指す。北部スーダン人も多様な民族集団から構成されるが、政治的に主流であるのはアラブ人であり、赤人は主として彼らに対する用語である。エチオピア高地に居住する人びとの構成も多民族であるが、政治的な実権を握ってきたのは、アラブ人と同様セム系の言語を話すアムハラ人とティグライ（ティグレ）人である。かつて両者は、アビシニア人と呼ばれていた。紀元前から続くエチオピアの文明——国家、文字、キリスト教に象徴される——を担ってきたと自認する人びとである。人口的には最大の集団であるオロモ人（かつては「ガラ」と呼ばれていた）は、国家のなかで周辺化されアムハラ人の蔑視の対象になっていた。西部や南部の低地に居住する黒人たちは、オロモよりさらに周辺化された存在である。アニューワ人やパリ人からみれば、高地人内部の差異は問題ではなく、一様に赤人と分類されている。

二〇世紀半ばまで人種分類では、アラブ人はセムであり、アムハラ人はセム、あるいはハム化したセムである。オロモ人はハムである。パリ人、アニューワ人の人種の民俗分類と同様、ヨーロッパの人種分類も彼らを黒人とはみなしていない。

パリ人とアニューワ人にとつての肌の色の意味あい、過去から現在に至る赤人や白人との接触の歴史におおきく規定されている。赤人にとつて、黒人はながらく奴隷と同義であった。⁽⁹⁾ 奴隷は、アラビア語でアビッド (*abid*)、アムハラ語ではバリア (*Baria*) と言う。現在でもこれらの語は肌の黒い人びとに対する蔑称として使用されている。

スーダンとエチオピアでは、二〇世紀になって奴隷制が廃止されたのちも、⁽¹⁰⁾ 黒人に対する差別と搾取のイデオロギーは継続した。スーダンは一九五六年に植民地支配から独立したが、独立後の約半世紀のほとんどは内戦状態にある。パリ人やアニューワ人はこの戦争を黒人と赤人、つまりアラブ人のあいだの戦いと捉えている。エチオピアは、過去三〇年のあいだに政治体制の大変動を二度にわたって経験した。しかし、一九七四年までの帝政時代、一九七四年から一七年間続いた社会主義時代、一九九一年から現在に至る民族集団単位の自治に基づく連邦制の時代を通じて、低地の黒人たちの政治・社会・文化的な周辺化は、一定の改善はみられたものの、基本的には継続している。⁽¹¹⁾

したがって、パリ人とアニューワ人が赤人に対する敵意と否定的な感情を持つことは当然といえる。他方で白人に対

しては、否定的というよりは、むしろ肯定的な位置づけがなされている。パリ人とアニューワ人は二〇世紀の初頭に、イギリス人が指揮する植民地政府軍と戦い、敗北した経緯があり、植民地統治下の関係も必ずしも平和的で平穏なものではなかったこと、さらにエチオピア領内のアニューワ人は、一九三七年から四年間、イタリアの暴力的な軍政下に置かれていたことを考えると (Kurimoto 1992; 栗本 一九九八、一九九九)、この肯定的評価は興味深い。

黒、赤、白の認識は、不平等な関係の反映であるという意味で、世界認識の表現の一形態でもある。この点で、現代のアニューワ人が、なぜ白人は「銃」(金属製の機械、工業製品の象徴)と「紙」(文字システム、国家システムの象徴)を独占しているのかを説明する神話を語ることは示唆的である (Kurimoto 2001)。神話によれば、二つの富と権力の源泉は、最初には黒人の所有物だったのだが、白人に持ち去られてしまったのだという。ちなみにこの神話には赤人は登場しない。

この問題と関連して、白という色には肯定的な価値が、黒には否定的な価値が付与されている。たとえば、「腹が白い」人は清廉で良い人であるのに対して、「腹が黒い」のは邪悪な人である。また、一般に肌の色が薄いことは美男美女の要件のひとつである。ただし、黒は雨雲の色であり、雨と結びついている。これは本書のチャンナ論文で扱っているインドの事例と共通するが、スーダンとエチオピアにおいても、この文脈では黒には肯定的な価値が付与されている。「白」と「黒」に対する価値づけが、白人との直接的接触の前後で変化したのかどうかという問題は、資料の制約があり不詳である。

もちろん、白黒という色に対する価値評価が、人種のランクづけに直接結びつくわけではない。しかし、色彩用語の価値づけと、肌の色のランクづけは、相互に関連したテーマであるといえる。

ヨーロッパ人のまなざし

セリグマンの人種分類と「ハム仮説」¹²⁾

さて、最初に述べたように、近代ヨーロッパの人種観は、たんに研究のレベルだけでなく、植民地統治のあり方や脱植民地期の政治にもおきな影響を与えてきた。ここで、二〇世紀前半におけるアフリカの人種分類の代表例として、イギリスの人類学者セリグマン (C. G. Seligman) ¹³⁾ が著した『アフリカの諸人種』をとりあげてみよう。彼の分類は、学問的に革新的というものではなく、一九世紀後半以降の一般的な理解を総括的にまとめたものである。また、黒人ニグロは高度な文化や歴史の担い手にはなれず、したがって高度な文化の名に値するものはすべて「白人」によってもたらされたという、当時支配的であった人種差別主義的な前提に立っている点でも、人種分類と認識の代表例と考えることができる。

一九三〇年にオックスフォード大学出版局から出版された『アフリカの諸人種』は、三九年、五七年、六六年と改訂版を重ねている。日本の文庫本程度の大きさのこの本は、手軽なハンドブックとしてひろく読まれたものと考えられる。形質人類学と民族誌が交じりあった、現在からみれば奇異に思える内容は、当時はむしろ科学的なものとして受け入れられたのだろう。セリグマンは、肌の色、身長、頭髪の縮れぐあい、頭部のかたち、顔と鼻の形状といった身体特徴に基づき、アフリカの諸人種を以下のように分類した。¹⁴⁾

- ① プッシュUMAN、ホットtentott、ニグリロ…ニグリロとは身長の高い黒人種のこと、ここではピグミーを指す。
- ② ニグロ…アフリカにおけるふつうの黒人。
- ③ ハム…エジプト人とエチオピア人のほとんど、ソマリ人、ベジャ人など、北東アフリカの諸集団と、北アフリ

カのベルベル人を含む。エチオピアのアムハラ人はもともとセム系の言語を話していたがハム化した。

④ ハム化したニグロ（ナイル・ハム系、ナイル系、バントゥ系）…ナイル・ハム系は主として東アフリカに、ナイル系はスーダン南部と東アフリカに居住する。

⑤ セム…アラブ人を指す。

セムとハムは旧約聖書に由来する名前である。「創世記」によれば、ノアにはセム、ハム、ヤベテという三人の子があり、全世界の民は彼らの子孫である。ハムは父ノアの裸を見たために、ノアはハムの息子カナンを呪った。「カナンはのろわれよ。彼はしもべのしもべとなって、その兄弟たちに仕える」（「創世記」第九章、日本聖書協会訳）。ユダヤ人とアラブ人はセムの子孫と考えられたが、ハムという概念の内容は時代とともに揺れ動いた。近世ヨーロッパでは、すべての黒人は「のろわれた人びと」であるハムの子孫と考えられ、それは「劣等人種」としての黒人の地位とうまく整合した。近代になると、黒人一般を指すのではなく、身体的特徴が黒人的ではなく、ヨーロッパの基準からすると顔立ちの整った（鼻筋のおおった高い鼻と分厚くない唇）北東アフリカの人びとを意味する語として用いられるようになった。そして、セリグマンのように、ハム系の人びとは黒人という意味でのアフリカ人ではなく、むしろ白人（コーカソイド）であるとみなされるようになったのである（図1）（Sarders 1969）。後述のように、現在ではハムという用語は、その人種差別的な偏向のゆえに、言語学的にも人類学的にも死語となっている。¹⁵

現在の言語・民族集団の分類では、ハム系はクシ系と呼ばれ、セム系とともにアフロ・アジア語族の下位区分を構成している。ナイル・ハム系は、東および南ナイル系に再分類され、現在は西ナイル系と呼ばれるかつての狭い意味でのナイル系とあわせて、ナイル系を構成している。ただし、名称は変化したが、分類の枠組みだけは、セリグマンの時代からさほど変化していない。

さて、セリグマンの『アフリカの諸人種』によれば、アフリカの諸文明は、白人とおなじく「ヨーロッパ人」であり、アラビア半島が原郷であると考えられたハムがもたらしたものである。ハムの影響の経路は二つあり、ひとつは



図1 セリグマンが記録した、ナイル系(シルック人)とナイル・ハム系(バリ人)の諸タイプ。上左と中央は、シルックの貴族階層の男性頭部の正面と側面。上右は、シルックの「ニグロ的」タイプ。下左と中央は、バリの首長。下右は、この首長の下僕である従属階層ドゥピ(dupi)の男性。いずれも、支配階層は非ニグロ的、被支配階層はニグロ的顔立ちと頭部の特徴をもつことの証左として掲載されている。(Seligman and Seligman 1932: plates III, XXII)

古代エジプト、もうひとつは牧畜民のハムである。牧畜ハムは、鉄器文化を有しており、軍事的に卓越した優秀な人びとで、石器時代の段階にあったニグロの農耕民を征服して国家を形成した。大湖地方の諸王国——ニヨロ、アンコーレ、ルワンダなど——がその例である。これは征服国家説の一ヴァージョンであり、「ハム仮説」と呼ばれる。また、セムとの混血によつて鉄器文化を獲得したバントウ系の人びとは、その卓越した技術のゆえに、ブッシュマンやホットテントットなどの原住民を征服、吸収しつつ、アフリカの東部、中部、南部にまたがる広大な地域に拡大することができた。

近代ヨーロッパ人は、アフリカに高文化や文明の証拠を見いだすと、アフリカ人の手による自生的な発展の結果ではなく、「外部」からもた